

## 「磯野富士子・A.モスタールト記念文庫」について

芝山 豊

清泉女学院大学

### **Introduction to the ‘Fujiko Isono & A. Mostaert Memorial Collection’ in the Library of Seisen Jogakuin College**

**SHIBAYAMA Yutaka**

Seisen Jogakuin College

本稿は、清泉女学院大学人間学部の学生が制作する清泉女学院大学図書館「磯野富士子・A.モスタールト記念文庫」紹介動画のためのスクリプトとして執筆されたものである。本誌掲載にあたり、若干の書誌情報と注を加えた。

学生：本日は、本学図書館にある「磯野富士子・A.モスタールト記念文庫」について、2022年3月にご退職になる芝山豊先生からお話しをおうかがいしたいと思います。

芝山先生、よろしくお願ひ致します。

芝山：はい。よろしくお願ひします。

Q1：「磯野富士子・A.モスタールト記念文庫」は、お二人の方のお名前が冠されているわけですが、このお二人はどのような方なのでしょうか？

A1：磯野富士子先生は、家族問題の研究者、平和活動家、翻訳者、そしてモンゴル学者としても広く知られた方です。1918年（大正7年）に生まれ、2008年（平成20年）、89歳で帰天されました。

お父様は「日本の潜水艦の父」として知られる穂積律之助、お祖父様は、日本史の教科書の民法制定に登場する法学者、穂積陳重、その妻の歌子お祖母様は、今年の大河ドラマの主人公であった渋沢栄一の長女なので、富士子先生は渋沢栄一の曾孫ということになりますね。

学生時代、1939年、日米学生会議参加のため宮澤喜一（後の総理大臣）らと共に渡米、女性問題をテーマにスピーチを行うなど、女性の活躍が極めて限られていた時代には、稀な国際的経験をした方です。その年は、ちょうど、ソ連・モンゴル軍と日本軍の軍事衝突、モンゴル国では「ハルハ河戦争」と呼ばれている「ノモンハン事件」が起こった年ですが、アメリカで日本大敗と報じられた会戦が帰国した日本では日本の大勝利となっているといったことを経験し、クリティカルなものを見方を身につけておられました。

大学卒業後は、生涯、英文学の道を進みたいと願ひ、実際、オルコットの翻訳などもされていたのですが、小説家野上弥生子さんに説得されて、法社会学に関心を寄せる研究者であった磯野誠一先生（1910-2004）と結婚されました。ところが、ある日、モンゴル帝国時代のキリスト教遺跡オロンスムの発掘で有名な江上波夫さんが、突然、新居を訪れ、誠一先生に蒙古自治政府の首都張家口の西北研究所<sup>1</sup>に調査活動に行かないかと誘われたのです。

戦時下、自由な研究が出来ずにいた誠一先生は参加を即決し、富士子先生も縁もゆかりもなかったモンゴルへの調査に同行することを決意、西北研究所の研究員となりました。

そんなわけで、磯野夫妻に現地での学術調査のために、モンゴル語を本格的に学ぶ必要が生じたことから、富士子先生とモスタールト神父の出会いが生まれることになったのです。

モスタールト (Mostaert) 神父のファーストネームは、フランス語ではアントワヌ (Antoine)、オランダ語ではアントーン (Antoon)。現在、モンゴル国等ではオランダ語のアントーン・モスタールトの表記で知られ、中国や台湾では、田清波 (Tian Qingbo) という中国名でも知られています。モスタールト神父は、1881年に生まれ、1971年に帰天されました。

モスタールト神父は、C.I.C.M. (Congregatio Immaculati Cordis Mariae マリアの汚れなき御心の会) という修道会に属する司祭です。この会は、日本では、淳心会、あるいはスクート会の名前で、中国では、聖母聖心会として知られています。モスタールト神父は、現在、中華人民共和国の一部、内モンゴル自治区に含まれる、オルドスのボロ・バルガスンで、モンゴル人の信徒の司牧活動と要理書の翻訳、言語研究活動等に従事されました。後に、北京へ移りましたが、モンゴル人司祭の養成や要理関係書の翻訳の監修の他、輔仁大学を拠点にモンゴル研究の発信も精力的に続けられました。

このモスタールト神父と富士子先生の出会いと再会については、わたしの下手な説明より、1949年に出版された富士子先生の著書『冬のモンゴル』の生き生きとした描写を読んでもいただくのがよいでしょう。

1944年11月から4か月にわたる調査を終えて、1945年4月、北京にもどって、恩人モスタールト神父を再度訪問した折の記述です<sup>2</sup>。では、朗読をお願いします。

北京に着いた翌日は早速北堂にモスタールト神父様をお訪ねする。アントワヌ・モスタールト師はベルギーの方で、1906年から1925年までの19年間を、伝道のためオルドス地方の南部で過ごさ

れた。この間に土地の人たちから採集された口碑伝承をローマ字で転写されたものが、1937年に輔仁大学のモニュメンタ・セリカより“Textes Oraux Ordos”『オールドス口碑集』として出版された。モスタート師はその後も引き続き北京で研究をつづけられ、1941年より1944年にかけて、『オールドス語辞典』二巻と、その索引一巻を公にされた。また、甘肅地方におけるモンゴル語の研究もある。

私たちが初めてモスタート師にお眼にかかったのは昭和18年（1943年）秋であった。小林知生先生に御紹介いただいて北堂の一室に伺うと、サンタクローズのおじいさんとでもいいような大きなパール・モスタートが、偉い学者にお会いするというので大いに緊張している私たちをあたたかく迎えて下さった。そして、私たちがモンゴルのことを勉強しようとしているというただそのことだけのために、その場で巨大な『オールドス語辞典』二巻を贈って下さり、さらにその時にはまだ出版されていなかった第三巻をも、後にわざわざ厚和まで郵送して下さいました。その上に翌年の四月に再びお訪ねした折には、全七百頁にのぼる大冊の『オールドス口碑集』をいただいた。これは特に私の勉強のためには是非必要なので何カ月かの耐乏生活を覚悟して貰おうと思っていたものだけに、その感激は私には到底表現することなどできない。

モンゴル語をほとんど知らず、『オールドス語辞典』を引くのに必要なフランス語もろくにできない私が、無謀にも『オールドス語辞典』と仏和辞典を頼りに『オールドス口碑集』を読みにかかったのは、このモスタート師の御厚意にかづけられたからこそであった。最初は一日一行も読めなかったものが、そのうちにだんだんなれて来て、それまで全く不可解な文字をもって埋められていた大きな頁が、私にとって少しずつ物語の形をなしてくるのは、鍬をとって地中の宝を掘り出すようなたのしみとなった。私が『オールドス口碑集』と取りくんだことを、モスタート師はこの他お喜び下さり、その後も何かと心にかけていて下さるのだった。

春たけなわの北海公園と、ロックフェラーの寄附でできた北京図書館の前を歩いて、北堂の静かな門に入る。門番に「モスタート神父」にお眼にかかりたいと告げると、そんな人はいないという。こちらの

中国語もあぶないものだけれど、外国人の神父様たちはそれぞれ中国式の名前を持っていらっしゃる、この門番はそちらの方しか知らないのだ。また私たちもうっかりしてモスタールト師の中国のお名前を伺っていなかった。これまではそれで何不都合もなかったのだが……。押し問答をしていると、門内からもう一人が出て来て、私たちを頭の前から足の先までながめ、それからおもむろに口を聞いて、「お前さんたち、蒙古語を話す神父様に用があるんだろう?」。渡りに舟と、「そうだそうだ」とうなずいたら、さっきの男が、「どうしてわかるんだい?」と不思議そうな顔をする。二人目が「これを見ろよ」と指差したのが夫のはいていた防寒靴。通行人の目をひきながらごとりとごとりと歩いて来たのが、思わぬところで役に立つ。

「ああそれなら」と取次ぎに入ってくれたが、やがて植込みのかなたの回廊を渡っていらっしゃったモスタールト師が私たちの姿を認めて、大きく手を広げ、「ああ、あなたがたでしたか」と足を早められる。「あの門番がモンゴル人が訪ねて来たというので、誰かと思ったら……」というわけであった。モスタールト師は私たちがともかくもモンゴル語で話すのを大そう喜んで下さり、私たちのお話する西ウジムチンの風習とオルドス地方のそれとの比較や、デスクの上に広げてある『オルドス口碑集』の仏訳の進捗状態などを話して下さいました。

なお夫と二人でモスタールト師をおたずねしたのはこれが最後であったが、後に私が北京に留まることになってからは、奥地から荷物が届くまでに不自由だろうから、とあらたに『オルドス口碑集』を一冊と、御自分が使っていたらっしゃった署名入りの辞典を下された。そればかりでなく、終戦後奥地から本の来るあてがなくなってからは、「この前にあげた辞典は古いものだったから」とさらに正式に製本した『オルドス語辞典』三巻を下されるなど、私の勉強のためにモスタールト師が与えて下さった恩恵は言いつくせないものである。

しかし、それにもまして尊いのは、モスタールト師の人となりによって示される学問の道である。自己の希望や偏見を捨てて、できる限り客観的に真理を探求することが学問であるなら、学問に志すものはどんな場合にもそうした態度で生きて行かなければならない。とかく

一つの研究を始めると、それ以外のことがすべて煩わしくなり、また、見当ちがいな負けじ魂が出たり、人物に対する感情によってその人の説を批評してみたくなる。だが、日常の生活にあたって物事を客観的に判断することができないようなもの、自我から生れた独断を不変の法則と思いこみたがるようなものが、どうして研究をする時にだけ純粋な学問的態度を取ることができるだろう。科学的精神というものは仕事着のように研究をする時にだけ身につければ済むものでなく、全生活が真を知ろうとする心によって支配されている人こそ、本当の学者なのだと思う。

人間の小さな力をもって自然と人間性の神秘を探るには、全部の研究者が力を合わせても遠く及ばないというのに、その一人一人がお互いの小さな力を「学者の偏屈」や独占欲で切り崩し合っていたら、一体何ができるというのだろうか。研究をする人たちがそれぞれの部門において、真理探求という共通の目的のために、客観的に最も目的に適った行動をとるなら、学問は今日よりもずっと大きな進歩をとげることができるにちがいない。

人間が人間である以上これは夢であるかも知れないけれど、研究の対象を検討するのと同じ客観的な冷静さをもって、自己の心と行動を批判することに努め、自我を捨てて真理につくことを真剣に願う人たちが、共通の研究目的によって結ばれたなら、それはこの世で作り得る最も美しい人間関係の一つではないだろうか。もし世界中の学者がこうした心で結びつくことができたなら、そして、人間が自分の主観にのみ頼らないで、全体の中にある自己というものを客観的に眺められるようになったら、今日ある大小の難問題の多くは解決される時が来るような気がする。

本当の学問ができるようになりたいと常に願いながらも、すぐにガツガツと机にかじりつき、自分だけの知的食欲を満足させたる私自身に、何度となく愛想をつかしながらも、自分の進もうとする行手にモスタルト師やキュリー夫妻を見る時に、私は真の学問の持つ可能性を信じたいと思う。

この記述の後、磯野夫妻は、一旦、張家口に戻りますが、ベルリン陥落が伝えられる中、富士子先生は北京へ、そして、誠一先生は、富士子先生の制止を振り切って西ウジムチン奥地の調査地に向かいました。

そして、富士子先生の心配の通り、敗戦後、誠一先生は行方不明になってしまいます。誠一先生はソ連軍に捕まり、ウランバートルに2年間抑留されてしまったのです<sup>3</sup>。

夫が行方不明になった富士子先生を励まし続けたモスタールト神父は、1946年、着の身着のまま単身日本へ帰国した富士子先生のもとに、日本の方言地理学で有名なグロータス神父の協力により『オルドス口碑集』テキストやその訳稿、調査資料を送り届けました。

モスタールト神父は中華人民共和国の成立によって、モンゴル人の司牧の可能性が閉ざされると、1949年、アメリカのアーリントンに移り、ハーヴァード燕京研究所等を拠点にモンゴル研究に専心し、1965年引退して、故国ベルギーに戻りました。

富士子先生の『オルドス口碑集』の翻訳は、1944年に開始され、1949年にはほぼ完成していましたが、出版されたのは、1966年（平凡社の東洋文庫59）でした。これは部分訳で、原典の6分の1、富士子先生の感覚としては一割程度に過ぎないので、訳稿のほとんどがまだ日の目を見ていないことになります。

富士子先生とモスタールト神父の交流は1971年に神父が帰天されるまで続きました。お二人の交流について、富士子先生は、1993年ベルギーで行われたモスタールト神父を記念するシンポジウムに「モスタールト神父とわたし」<sup>4</sup>という心の籠った英語の文章を寄せておられます。

Q2：記念文庫にはどんな資料が収められているのですか？

A2：一番大切なのは、さきほど朗読していただいた文章で語られていた『オルドス語辞典』、『オルドス口碑集』、『オルドス口碑集フラ

ンス語訳』、日本語全文訳ノートの現物ですね。

その他に、富士子先生著作、西北研究所のメンバーから贈られた書籍、『オルドス口碑集』翻訳出版に際して、モスタールト神父から受け取った写真、オーウェン・ラティモアの回想録を書く際に使われた貴重な音源なども含まれています<sup>5</sup>。

Q3：『オルドス口碑集』というのはどのようなものなのでしょう？

A3：オルドスは場所の名前です。漢語では河套と呼ばれる黄河の大彎曲部に囲まれた場所で、代々、チンギス・ハーン祭祀を司る人々が住んでいる土地で、そこで話されるモンゴル語であるオルドス語はユニークな特徴があることでも知られています。

また、オルドスは、モンゴルとキリスト教の出会い、また清代の禁教を経て後のキリスト教教会の再興にとっても、歴史的に重要な意義のある場所です。

オルドスは早くから、モンゴル文化と漢文化が会いながらも、棲みわけてきた場所であり、モンゴルに再び、キリスト教が戻ってきたときも、モンゴル人の教会の拠点となった場所であり、文化共生の立場からも、とても興味深い場所だと言えます。

モスタールト神父が、オルドスでモンゴル人たちの司牧にあたっていた期間、1906-1925年までの間に、オルドスのことばでのみ生活していた人々から、直接採集した説話、伝説、逸話、歌謡、謎々、子供遊び、祝詞、まじない、呪詛、侮辱、罵り、格言、措辞、ことわざ、常套句等、ありとあらゆる口承の言語表現を納めたものが『オルドス口碑集』です。

テキストは言語学的資料としての側面を意識して、モンゴル文字ではなく、ラテン文字を用いた音声学的表記で精密に表記されており、注や類似文例等が収められています。

この100年くらいの間に、失われたり、大きな変化をうけたりしてきた事象も含め、モンゴルの言語学、民族学、民俗学、歴史学に



とって、極めて貴重な資料なのです。

すべて、文章語ではなく、口伝えの記録として伝わったものを、様々な人の声を通じて、聞き取り、転写したものですから、翻訳するのはとても難しいのですが、富士子先生は、フランス語の訳より、日本語の方がよりわかりやすく伝えられる側面もあるのではないかと考えておられました。

Q4: どのような経緯でそうした資料が本学の図書館にやってきのですか？

A4: その質問にお答えするためには、少し、個人的なことをお話ししなくてはなりません。

磯野富士子先生の「偲ぶ会」に出席した三人の研究者が、それぞれ追悼文を書いています。中見立夫さん「磯野富士子さんのことども」(『月刊みすず』2008年6月号、20-32頁)、宮脇淳子さん「モンゴル学者・磯野富士子さんのこと」(『ペーソな』2008年9月号、66-69頁)、そして、芝山豊「磯野富士子先生を偲んで」(『モンゴル研究』No.25、2008年12月、42-45頁)です。三人ともほぼ、同世代で、富士子先生とは親子ほどの年齢差があるのですが、中見さん、宮脇さん、ともに「富士子さん」と書いておられます。

大学で専任職に就かなかった方ですし、ご本人は、「先生と呼ばれるほどの・・・でなし」とまで直截に言われなくても、「先生」と呼ばれることが好きではなかったのです。

それを承知しながら、わたしが「先生」と呼んでいたのは、実は、わたしは大学で先生に教えていただいた学生の一人だからです。

「それはずいぶん昔のことですよ、もうダメよ」と言われたのですが、「友人のモンゴルの詩人から、“たとえ、一時であれ、教えを受けた人は師(バクシ)と仰ぎ、生涯、敬意を忘れてはならない”と戒められているし、先生はいまでも先生ですから」と言うと、「モンゴル人にはそういうこと言う人がいるわね。じゃあ、まあ、いいわ」

となったわけです。

磯野富士子先生は、『オールドスロ碑集』出版後、1970年代には、東京大学、リーズ大学で講義をされ、ラティモア・モンゴル研究所で研究をされていましたが、1974年、内モンゴルではなく、モンゴル人民共和国の誕生に焦点を当てた『モンゴル革命』（中公新書）を出版されました。その出版直後の特別集中講義をわたしは受講したのです。

大学の3、4年、後期課程の講義だったので、わたしには受講資格がなかったのですが、特別講座を担当されていた小貫雅男先生に特別許可をお願いして、先輩たちに交じって拝聴しました。とても刺激的な講義でした。講義の後、パリに戻られた富士子先生に手紙を書き、学生の作った研究会誌を送り、研究への助言や励ましをいただきました。権威ある中国学者に、「モンゴル民衆の思想史研究など学問として成立しない」と一蹴される中、富士子先生は、モンゴル研究には、「思想的アプローチはきわめて遅れており、これを問題にしていらっしゃるのは大変たのもしく思います。資料に限られているのが困るのですが、公式的な歴史書ではなく、回想記、文学の中から探していけば、思いのほかに材料があるのでしょうか。」とお手紙に書いて下さいました。

こうした励ましのおかげで、モンゴルの民衆思想をテーマとした「アラトの思想」という拙い卒業論文を書きあげて、進学しました。

就職後は暫し御無沙汰が続いていたのですが、富士子先生が日本にもどって来られた1980年代末、現在大阪大学教授の今岡良子さんと一緒に、再び、お目にかかる機会を得ました。その頃、わたしは、モンゴル語訳の聖書の研究に手を染め始めていて、「プロテスタントのミッションによるモンゴル語聖書翻訳活動の資料はあるのですが、カトリックの情報がなく困っています」とお話ししたところ、それなら、グロータス神父へ連絡を取るようにとのアドバイスをいただきました。

早速、グロータス神父に連絡をとると、C.I.C.M.に残っているモ

ンゴル語訳文献の情報と、「民主化」後のモンゴル国、ウランバートルにカトリック教会を立ち上げるため赴任されるグーセンス神父をご紹介いただくことができました。日本におられたグーセンス神父と共に、フィリピンからモンゴルにわたり、モンゴル国のカトリック教会の基礎を固められ、後に、司教になられたウエンセスラオ・パディラ神父など、カトリック・ミッションの方々と知り合い、モンゴル国で整備されつつあったモンゴル語による典礼とオールドスのモンゴル語資料との関係を知ることになりました<sup>6</sup>。

誠一先生が体調を崩され、磯野ご夫妻は、ご自宅から高齢者住宅へ転居されるにあたり、書籍や資料を利用者のことを考えて、法律関係は東京大学、モンゴル史関係は岡田英弘・宮脇淳子ご夫妻の研究室という風に寄贈されました。蒋介石の私的顧問であったことでも知られるアメリカの東洋学者、オーウェン・ラティモアとの思い出に繋がる品々は、石濱文庫を有する大阪外国語大学附属図書館（現在は大阪大学附属図書館）に寄贈されました。

最後まで寄贈先が決まっていなかったのが、20代のモンゴル滞在中、そして、苦難の後、再び手元に戻ってからも、離すことのなかった『オールドス口碑集』、そのテキストと格闘しながらの翻訳成果である翻訳ノートなどでした。

激動の日々の思い出のぎっしりと詰まったものは、富士子先生にとって、処分するには忍びないものだったと思います。とは言え、その思い出や価値を共有できない人にとっては、ただ、汚い古本や文反故にしか見えないものです。遺品整理の際には、焼却処分の対象となりかねないことを富士子先生は懸念されていました。また、ご本人も、当時出たばかりのボールペンで大学ノートに書込んである翻訳原稿について、「ボールペンの古いの、時がたつとにじんじょうのよね。それでまた、わたしは希代の悪筆で、捨てちゃおうか」と、一時は、本気で廃棄も考えられたようです。

しかし、結局、逡巡の末、モンゴルの文学や思想を研究し、1992年からモスタールト神父と繋がる C.I.C.M. の神父方と交流が始ま

っていた「芝山さんならいいやと思って送りつけちゃった」<sup>7</sup>わけです。

この貴重な知的遺産を個人で保管するのは、いささか荷が勝ちすぎることなので、1999年、当時、清泉女学院短期大学の図書館長であった北原明文先生にご相談し、清泉女学院短期大学図書館に「磯野富士子・A.モスタールト記念文庫」として、保管させていただくことになり、富士子先生にもその旨、ご了解いただきました。

その時点で、資料を整理し、翻訳の出版準備にかかるころだったのですが、四年制大学設置の要員として神戸から長野に呼ばれて来ていたわたしは、日々の教育活動と、大学設置準備の仕事に忙殺されており、一部の研究者にお見せすることしかできませんでした。

2003年、ようやく清泉女学院大学が設置され、人間学部に所属が移り、2006、2007年、「地域の知の拠点活性化」の一環として、大学・短期大学共同研究を組織し、中国内モンゴル師範大学、内モンゴル大学、そして、モンゴル国のアントーン・モスタールトモンゴル研究センターの協力を得て、モスタールト神父がおられたボロ・バルガスンの教会を訪れ、モスタールト神父の教え子であり、モンゴル人唯一の司教となったヨセフ・馬・テグスビリグ司教<sup>8</sup>らと直接お目にかかり、多くのことを教えていただくことができました。

その共同研究の成果を報告書『南北モンゴルカトリック教会の研究』（清泉女学院大学、教育文化研究所、2008年）として纏めている最中、富士子先生の訃報が入りました。冊子をお送りして、馬司教とモスタールト神父について語り合ったことなども詳しくお話したかったのですが、結局、編者のあとがきに帰天された富士子先生に献辞を書くという残念なことになってしまいました。

この共同研究は、やがて、本学教育文化研究所と五反田の清泉女子大学キリスト教文化研究所の協働による共催国際シンポジウム「モンゴル語聖書とアジアのキリスト教文化」開催へとつながり、さらに、2021年3月発行の『聖書とモンゴル』（教文館、2021年）<sup>9</sup>に結実しました。

富士子先生のお励ましやご紹介がなければ、それらもなかったかも知れないと思っています。

Q5: 図書館には、磯野富士子先生にゆかりのある絵が飾られていると聞いたのですが、どんな絵ですか？

A5: 上野キャンパスの図書館で目にした方は多いはずですよ。ほら、あの書架への入り口あたりにかかっています。

大きな扉を前にした一人のラマ僧の姿が描かれていて、その僧は、いましもその扉を押し開けようとしていますね

アジアの歴史に関心を抱く方なら、この彩色された絵に元になったスケッチがあることにお気づきになるかも知れません。探検家スヴェン・ヘディンの『チベット遠征』の挿絵、「第五代タシ・ラマ廟の入り口」です<sup>10</sup>。実は、ヘディンのスケッチには扉を開ける僧の周囲に他に9人の僧が描かれているのですが、彩色画は扉の前の一人だけを描いています。歴史と叡智が詰まった聖なる場所への扉を開く一人の僧。扉の向こうには、どんなものが待っているのでしょうか。清澄な空気と静寂の中に、知的なスリルを感じさせる劇的な場面です。

その絵は富士子先生のヨーロッパでの何か大切な思い出と繋がるものであったようです。おそらくストックホルムでのことだと思のですが、1952年に没したヘディン自身ではなく、ヘディンを直接知る人物で、ヘディンのスケッチをもとに彩色画を描いた高名な画家と偶然出会い、その方から記念に贈られたものというお話だったように記憶しています。

この絵が本学図書館に飾られることになった経緯もお話しておきましょう。

2007年の秋、磯野富士子先生のご体調が悪いようだとのお知らせが友人から届きました。慌てて電話をしましたが、繋がらず、ようやく電話で話せた時、先生は「これからホスピスに移るつもりで用意

をしている」と告げられ、「手元に残してずっと飾っている絵があるのだが、これをどうしようか」とのことだったので、「引き取り手が他になれば、わたしが引き受けます」と申し上げました。

年が明けて、2008年2月初めになって、先生が1月5日にご帰天になった旨、ご遺族からお電話がありました。「絵はオリジナルではないが、捨てずに必ず芝山に渡すように」と言い残されたとのことでした。「偲ぶ会」の後、宮脇淳子さんが、気に入られたようなので、モンゴル史でユニークな成果をあげてこられた女性研究者である宮脇さんのところは、その絵に相応しい場所に思えたので、東京の岡田英弘、宮脇淳子ご夫妻の研究室に飾っていただきました。岡田先生ご逝去後、研究室を整理されるにあたり、拙文でこの絵についての富士子先生とわたしのやり取りの詳細を知られた宮脇淳子さんが、長野に送り届けて下さいました。

形見となった絵を自宅の書斎に飾るより、清泉の学生や、図書館を利用される方々（とりわけ、女性の方々）に見てほしいと思い、図書館に寄贈しました。

磯野富士子先生を直接知る人たちが、等しく称えるのは、先生が、所謂、制度上の「プロの学者」とは異なる、「素人」のまなざしをもった優れた研究者だったことです。ご自分では、よく「もぐり」と言っておられましたが、それは、「プロ」を自称し、マンスプレイングを自覚しないタイプの研究者たちの怪しさに与する気はないのだという気概のあらわれでもあったように思います。

「モスタートト神父とわたし」の中で、「神父様にただ一つ文句のあるのは、古風な *Madame Seiichi Isono* という表記を使うことだった」と書いておられますが、モンゴルの人々と暮らしながら、共通善のための「本当の学問」への志を固めた富士子先生は、旧弊な家制度や母との葛藤を抱えながら、時代と闘った女性でもありました。

「婦人解放論の混迷」（『朝日ジャーナル』）での家事労働価値をめぐる議論によって、日本のフェミニズム研究を語る上で忘れることのできない1960年代第二次主婦論争の発端となった家族と女性の

問題を提起した、女性たちのための研究者でした。

自分は「決してアクティヴィストではない」と言いながらも、1950年代半ば滞英留学中、ブリティッシュ・カウンシルに抗って、日本からの被爆者の通訳のボランティアを行ったエピソードが示すように、常に、自分の良心に照らして、躊躇なくまっすぐに行動する方でした<sup>11</sup>。また、植民地主義的な国策として設置された西北研究所にあって、深い後悔とともに、たとえ、旗の顧問と呼ばれた「特務」関係者の便宜にあずかることがあったとしても、「モンゴル人を下に見るようなことは一度もしたことはなかった」と、言い切ることのできる稀有な存在でした。

イデオロギー的な紋切り型の言い回しを嫌い、学者仲間内だけに通じる言葉を疑い、常に知的好奇心と、天邪鬼な批判精神、「素人」の自由な発想を大切にされていました。

ある時期から「ケアの文化」の中に身を置く人だったと言えるかも知れませんが、20代での経験の記録である、『冬のモンゴル』のモスタールト神父への言及にあったように、学知は、学者の専有物ではなく、もっとも小さくされた人々の幸福へ繋がる、みんなのものだという確信と潔さは、傘寿を過ぎても変わることがなく、毎日、新たな発見のために、勉学を続けておられました。

富士子先生は、きっと、清泉の短大・大学・大学院の学生の皆さんにとって、ばかりでなく、教員、職員にとってもロールモデルとなるのではないかなと思うのです。

そんな生涯、知的好奇心を失うことのなかった富士子先生が最後まで手元に置き、飾っておられた絵を見て、知の探究へのワクワク感を感じてもらえればなと願っています。

Q6：これから「磯野富士子・A.モスタールト記念文庫」はどんな風に維持、活用が期待されるでしょうか？

A6：具体的に言いますと、まずは、資料の経年劣化対策を考えた資

料の保全ですね。それほど、古い本ではありませんが、洋書の補修は単に壊れないようにするのではなく、なるべく発行時点での状態に近い状態に補修することです。ただし、翻訳途中、綴じが痛んで、分冊になり、お布団の布で表装された本の姿はそのまま保存する方がよいでしょうね。

翻訳原稿は富士子先生が気にしておられたインクの問題がありますし、ノートの中の紙の酸化も心配です。資料保存に留意し、早急にデジタルスキャンしておく必要があるでしょう。

スキャンデータを、AIを利用したOCRによって、デジタル・データ化した日本語全訳、オールドス語原文テキスト、フランス語訳の対応箇所、それぞれ相互に比較できるようにすることによって、『オールドス口碑集』のデータベースを構築することが可能になります。

磯野富士子先生の訳の批判的検討、加筆や補注については、静岡大学教授楊海英さんらオールドス出身の在日本のモンゴル人研究者や、各地のモンゴル学者や人類学者の協力が得られるはずですよ。

モスタート神父らの仕事を日本の図書館で蒐集し、活用していくためには、モンゴル国のアントーン・モスタートモンゴル研究センターや、ベルギーのルーヴェンにあるカトリック大学 KU LEUVEN の付属図書館等との協力等が考えられます。

モスタート神父やヨセフ・馬司教らが関わった聖書や要理書の翻訳についての研究資料も引き続き、収集していく必要があります。

ご存じかとも思いますが、最近の中華人民共和国内の少数民族、またそれらの人々の宗教組織が置かれた状況は、極めてデリケートなものですので、十分な配慮が必要ですが、ボロ・バルガスをはじめ、モンゴル人の教会や研究機関とも協力していければよいと思います。

日本の大学図書館については、「大学は、学部の種類、規模等に応じて、図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料を、図書館を中心に系統的に備えるものとする」とだけ定められていますが、文科省は、大学図書館に求められる機能・役割として、「コレ



クション構築と適切なナビゲーション」、「他機関・地域等との連携及び国際対応」などをあげています<sup>12</sup>。

これは、まさに、磯野富士子・A.モスタールト記念文庫に当てはまるのではないかと思います。

『オルドス口碑集』*Textes oraux Ordos : recueillis et publiés avec introduction, notes morphologiques, commentaires et glossaire / par Antoine Mostaert (Monumenta serica monograph series 1)*は1937年に北京で発行された768頁の部厚く30センチほどある大きな本です。戦前に出版された本なので、日本の図書館には、国立国会図書館はじめ、大学等少なくとも16機関くらいに本は存在しますが、カトリック大学では本学だけです

戦後に発行された、フランス語訳、*Folklore Ordos : traduction des textes oraux Ordos Antoine Mostaert (Monumenta serica monograph series, 11) Catholic University, 1947* を所蔵している大学図書館は5館です。不思議なことに、キリスト教系大学の図書館また国立国会図書館にも所蔵されていません。

勿論、磯野富士子先生の訳の東洋文庫版の翻訳を所蔵している大学図書館は本学も入れて358館ありますが、全文訳を所蔵しているのは本文庫だけです。

この世代と空間を超えた贈り物である文庫を、本学図書館だけでなく、カトリックセンターや教育文化研究所も一緒になり、本学の建学の精神、カトリックのヒューマニズムを特徴づけるコレクションのひとつとして、大切に育てていただきたいと思います。

清泉女子大のキリスト教文化研究所とも連携して、積極的に外部資金を獲得して共同研究活動を進めることも必要でしょう。そうしたことを通じて、本学が、西洋中心主義的なキリスト教像を抜け出した、21世紀らしい、フランシスコ教皇が示しておられる、福音の喜びに満ち、共生的な「ケアの文化を育む知の拠点」としての大学のアイデンティティーを示していただければ、本当に嬉しいです。

わたしは大学を離れますが、幸い、清泉女学院大学人間学部には、

学芸員資格を取得することができるコースがあり、これから図書館司書の資格もとれることになっていますから、学生のみなさんも、いろいろな関わりができそうです。

皆さんのご健闘、ご活躍をこころからお祈りしています。

---

<sup>1</sup> 西北研究所は、当時、徳王（テムチュクドンロブ）を首席とする蒙古自治政府（もと、蒙古聯合自治政府、ソ連やモンゴル人民共和国に含まれない、日本軍の影響範囲内にあったモンゴル地域）の首都、張家口に、善隣協会が日本の国策に沿って新たに作った研究組織。今西錦司、石田英一郎、藤枝晃、中尾佐助、梅棹忠夫といった戦後日本の学問世界をリードした錚々たる面々が集っており、この「蒙疆」をフィールドにした、生態学、人類学的な研究を行う組織によるフィールドワーク体験が、戦後日本の学問世界に大きな影響を与えることになったと評価されることが多い。

しかし、その本質を、磯野富士子『冬のモンゴル』中公文庫版（1986）「文庫版のためのあとがき」は、以下のように明快に述べている。

「もちろん、私たちがあのような調査を行うことができたのも、内モンゴルが日本の占領下にあったからこそであった。個人的には政府や軍部とは全く無関係な研究のつもりではあったが、西ウジムチンに入ることができたのは、その土地の「日本人顧問」の方々のお世話を受けたからに外ならない。あの方々にしても、主観的には、指導が必要であると信じておられたのであろう。

この本に出てくるモンゴルの友人たちが、私たちをどう見ていたかは、知るすべもない。

ただ、一つの国が他の国を直接に、あるいは間接的にも支配している場合には、それぞれの国に属している個人の間友情は、本当には成り立ちえないことを痛感するとともに、あの人々が対日協力者としてひどい目にあわなかったことを切に願うばかりである。」

この「あとがき」に触れ、海野弘『陰謀と幻想の大アジア』（平凡社、2005年）は、「今なお、この痛みは深く胸に突き刺さる。梅棹のタフさと磯野のナイーブさの間に、異文化との出会いの光と闇が交錯している」と記しているが、西北研究所関係者の中で、こうした反省を直截に語った人は磯野夫妻を除いては多くなかったし、「民博」や「京大人文研」について語る今

日の人々の中にも必ずしも多くはないと思う。

<sup>2</sup> 『冬のモンゴル』の初版は1949年北隆館刊であるが、朗読、引用には『冬のモンゴル』（中公文庫1986年）230-234頁を用いた。

<sup>3</sup> 鶴見俊輔対談、編集『語りつぐ戦後史（上）』（講談社文庫1975年）113-128頁、磯野誠一・鶴見俊輔の1967年の対談から。

この対談の中には「私の調査は軍にはまったく関係のないものですが、調査の地域は日本軍占領地ですから、間接には軍に依存している事実を、いつも後めたく思っていました。」との述懐とともに、以下のような回想も記されている。

「経棚から東へ行く途中で、なんの罪もない中国人を殺すんです。婦人を辱しめるし。だからこの連中といっしょにいる私はとても生きては帰れないと思いました。自分は違うといっても通用しませんものね、同じ日本人なんだから。

人がたまたま通ったからといって、ぐさっとやってしまうんですから、本当にいやだと思いましたね。兵隊はいやですね。上官に命令されて仕方なしにやっている。殺されるとき悲鳴を聞きましたけれど、私はあの時もうまったく声をあげて泣きたい気持ちになりましたね。それまで戦場で戦った経験がなかったので、こんなひどい仕打があつていいかということと、この人たちの同類として殺される日が、おそらく近いうちにくるだろうと思つて。

日本人は憎まれていたから、土地の中国人から偽りのニュースでおびきだされ、射たれたこともあります。」

<sup>4</sup> Fujiko Isono “Father Mostaert and I” *Antoine Mostaert (1881-1971) : C.I.C.M. missionary and scholar* edited by Klaus Sagaster (Louvain Chinese studies, 4-5) Ferdinand Verbiest Foundation, K.U. Leuven, 1999.

<sup>5</sup> オーウェン・ラティモア（Owen Lattimore 1900-1989）は幼少期を中国で過ごし、1930年代から米国の極東問題の専門家となり、1941年に蒋介石の政治顧問となった。1950年マッカーシズムの攻撃を受け、1960年渡英、1970年からリーズ大学教授を務めた後、パリのラティモア・モンゴル研究所長。磯野富士子はその研究所の研究員として蔵書を自由に使用した。『中国と私』（みすず書房1992年）は、晩年認知能力が衰えていたラティモアの簡単には脈絡が理解できない回想を磯野富士子が辛抱強く聞きとり、その音声記録を解説しながら編集したものである。文庫所蔵のカセットテープは

---

その時のものである。

彼女のラティモアへの評価は、ラティモア著、磯野富士子訳の『モンゴル——遊牧民と人民委員』（岩波書店 1966 年）の翻訳あとがきにかがうことができる。

<sup>6</sup> モンゴルにおける C.I.C.M.の活動については、Patrick M.W. Taveirne *THE CICM APOSTOLATE IN MONGOLIA LATE 19TH AND EARLY 20TH CENTURY* Unpublished and Revised Paper presented at the Conference on “The Importance of the History of Evangelization Taking CICM as an Example” Fu Jen Catholic University, Taipei City 30 November 2019 に詳しい。

<sup>7</sup> インタビュー：磯野富士子先生と『オールドスロ碑集』、『モンゴル研究』No.25、2008 年 52 頁。

<sup>8</sup> ヨセフ・馬仲牧・テグスビリグ司教については、『南北モンゴルカトリック教会の研究』（清泉女学院大学教育文化研究所、2008 年）、及び、芝山豊、滝澤克彦、都馬バイカル、荒井幸康編『聖書とモンゴル 翻訳文化論の新たな地平へ』（教文館 2021 年）290-291 頁を参照されたい。なお、同書の中に、カナ表記としてテグスベレグ、テグスビリグの 2 通りが見えているが、テグスビリグとするのが妥当と考えている。

<sup>9</sup> 芝山豊、滝澤克彦、都馬バイカル、荒井幸康編『聖書とモンゴル 翻訳文化論の新たな地平へ』（教文館 2021 年）。

<sup>10</sup> スヴェン・ヘディン著、金子民雄訳『チベット遠征』中公文庫 BIBLIO、2006 年、345 頁。

<sup>11</sup> 『現代人物事典』（朝日新聞社 1977 年）寺井美奈子「磯野富士子」及び注 7 のインタビュー。

<sup>12</sup> 大学図書館の整備について（審議のまとめ）——変革する大学にあって求められる大学図書館像——平成 22 年 12 月 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301607.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301607.htm)。